

双眸は心なし

一

こちらを見ていた、ような気がした。

「何それ」

「いや。何でもないです。覚えてないです」

「そう」

煙と一緒に口端から漏れ出した「つまんないの」は聞かなかったことにして、会話のセオリ―通りぼくは彼女に訊き返す。

「じゃあ、鳴海さんはどうなんですか。人生の、最初の記憶。覚えてるんですか」

「お風呂かな。家族と入ってる記憶がある」

ありがち、と言うにはそもそも手元にサンプルが無さすぎるから、ぼくはそのエピソードが凡庸なものなのか、特異なものなのか、その判別をつけられなかった。だから、間の抜けた相槌を打って、それでこの話題にピリオドを打った。

こちらを見ていたような気がしたのだ。それが最初の記憶だった。母親の眼差しだったと思う。それしか覚えていない。これを「記憶」のエピソードに計上していいかは、自分でも微妙なところだと考えている。だから、夢かもしれないし、願望なのかもしれない。ぼくの最初の記憶はぼくの中にしかないのだから、答え合わせはぼくにしかできない。そういうことで、ぼくは人生最初の記憶をこれということにしていた。

素肌にシャツが擦れる感覚に、ずっと慣れずにいる。服を着ないで布団に入るなんて、変だ。ぼくたちがやっていることも、ずっと変なのだ。

エアコンの風が当たって寒いから、大人しくバスローブを羽織ることにする。気付いたら床に落ちていたそれを拾い上げて、見えない埃を払うように何度か広げる。そうして満足したのちに、ぼくはガウンに袖を通した。いつ着てもぶかぶかな感じがする。身の丈に合っていないと、そう言われている感じ。腰ひもを引っ張って蝶々結びを作る。このまま眠るには心もとない格好だけど、寝巻を持ってきていないから我慢するしかない。

鳴海さんは寒くないのだろうか。目を向けて、視線がかち合う。いつの間にかサイドボードからスマートフォンを取っていたらしく、カレンダ―アプリの白色が薄暗いホテルの一室をぼんやり照らしていた。

「明日、暇？ シフト入ってないでしょ」

「授業ですよ。まあ、四限が終わったら暇ですけど」

「四限って何時だっけ」

「四時半です」

鳴海さんは視線を宙に泳がせる。浮かぶ煙の軌道をしばらく目で追ったあと、再び口を開く。

「ああ、じゃあいいや」

「どこか行きたかったですか」

「秋服買いに行きたかったんだけど。明日五時から病院だから、いや」

「次、休み被ってる日は多分暇ですよ。その日に行きましようか」

バイト先のグループラインに貼りつけられた『今月のシフト』を開いて、五日後に鳴海さんが休みであることを確認する。

「……ん、その日は無理だ」

「用事ですか？」

「命日、すばるくんの」

ああ、ごめんなさい。脊髄反射で口から出そうになった謝罪は一度齒の裏に留めて、一緒に息を飲む。

「ごめんね、なんか」

ぼくが飲んだ言葉が伝播したのかもしれない。感情の覗けない乾いた声色で、飛ばされそうなくらい軽い語調で、鳴海さんは謝罪をこぼした。

鳴海さんについて、ぼくが知っていることは多くない。ぼくの家の最寄り駅から二駅向この街に住んでいること。今年三十歳だけどフリーターから脱却する気はないこと。煙草が大好きなこと。不眠症で毎月心療内科にかかっていること。婚約者が二年前に死んでいること。

「……いえ。こちらこそ、すみませんでした」

結局、「秋服を買う予定」が決行となったのは、二週間後のことだった。鳴海さんから指定された、集合するのも難儀な大きい駅、に併設された商業ビル。名前くらいは聞いたことがあるけど、具体的にどこが入り口なのかとか、何が売っているのかとか、何も分からない。とにかく鳴海さんに言われた通り、『西館二階』と掲げられた看板を指して自動ドアの方に向かうと、既に鳴海さんはそこに立っていた。待ち合わせの時間から五分過ぎているから、当然のことだった。

「すみません、お待たせしました」

「別にいいけど。柳瀬、十五分前に『駅着きました』って連絡寄越してきたでしょ？」

「ああ、はい。そのあと何にも連絡入れてなかったですね。すみません」

「何かあった？」

「いや、迷子の子供をインフォメーションセンターに送り届けていて」

「遅刻の言い訳としては結構な常套句だけど」

あらぬ嫌疑をかけられそうになって咄嗟に視線を逸らすと、手を繋がれた五歳くらいの男の子が、繋いでいない方の手をぶんぶんとかちらに振ってきた。さっき送り届けた子供だった。彼の手を離さんと強く握る女性は、ぼくに気付いて何度も会釈をする。雑踏の中で、ありがとうございますと言っているような気がする。ぼくも軽く会釈を返して、再び鳴海さんに向き直った。

「……柳瀬に限っては言い訳じゃなさそう」

「ぼくは嘘つかないですよ」

「まあ、柳瀬って優しいからね」

どうも、と首をすくめる。鳴海さんに限らず、言われ慣れている。

「とりあえず西館集合にしたから、まずはあそこかな」

「あ、鳴海さん」

先導しようとした鳴海さんの足が止まる。振り向く。やっぱり。

「ちゃんと眠れましたか？ 今日」

メイクで隈は隠しているようだけど、なんとなくわかった。姿勢、表情、仕草、とか。

「……ほんとに柳瀬は優しいね」

鳴海さんは言葉とは裏腹に、一時間使った鉛筆の先端くらいの鋭さでぼくを睨んで、問いかけには答えず再び歩き始めた。ロングヘアがたなびく。答え合わせみたいに、ぼくはその髪がウェーブを描いていることによりやく気付いた。いつものストレートじゃなく。

若干の不機嫌をなだめつつ、西館のフロアを大体見終わって、鳴海さんが入手したのは青みがかったグレーのカーディガン一枚だった。端から荷物持ちをするつもりで来ていたから、当然そのショッパーはぼくの腕に提げられている。

不意に、鳴海さんがまっすぐだった進路を曲げ、そばに置かれていたベンチの方に吸われていく。慌ててぼくもそのルートを辿ったせいで変な軌道を描きつつ、ぼくは鳴海さんの隣に座った。

「いきなりどうしましたか」

「疲れた。眠い」

「やっぱり」

相変わらず微妙に丸みを帯びた睨みをこちらに向けて、鳴海さんは軽く嘆息する。

「柳瀬、肩貸して」

「いいですけど」

「膝枕は？」

「ダメです」

そうだよ、と鳴海さんはクスクス笑う。隣の隣のベンチで膝枕をしているカップルを見て、そう言ったのだろう。ぼくたちはそういうのじゃないからダメ。

「ありがとう」

鳴海さんはぼくの右肩に頭を預け、目を閉じる。そのうち小さな寝息が聞こえてくる。ぼくは、それが何に対する感謝の言葉だったのか、しばらく考えを巡らせていた。肩を貸したこと、膝枕を拒絶したこと。考える。ぼくの拒絶が無くて、鳴海さんはぼくに膝枕を求めないはずだから、多分あの応酬全てが冗談のつもりだろう。だから、「ありがとう」が何に向けられたものなのか、結論を簡単に出してぼくも軽く目を瞑る。考えは巡り続ける。今日、

晩ご飯どうしようか。外で食べるのが楽だろうな。どうせ鳴海さんはうちに泊まりに来る算段だろうから、あんまり遅くならない方がいい。そういえばゴムがそろそろなくなりそうかも。今度ドラッグストアで買っておかないと。使い切りのシャンプーもストックが切れそうだった気がする。鳴海さんはいつも紫色の、キラキラしたパッケージのやつを好んで使っている。近所のドラッグストアには売っていないから、帰路に着く前に買っておくのを忘れないようにしないといけない。あれじゃないと翌朝髪の毛が爆発するらしいから、ストックは必須だ。

ぼくと鳴海さんが恋人じゃないなら何なのかといえば、セフレ。セックスフレンド。セックスするフレンド。セックス、も、するフレンド。フレンドだと、鳴海さんからも思われているかどうかは定かではないけど。

「今日さ」

声がして横を向くと、鳴海さんが起きていた。

「泊まっていい」

「もちろん」

「ん」

不定形の相槌でぼくの承諾を確認した鳴海さんは、目が覚めてもなおぼくに体重を預けている。ぼんやりと、呼吸をしている。

「指輪」

「え」

「すばるくんと見たかったな」

寝起きの虚ろな眼差しが、向かいの看板に這う。ブライダルジュエリーの専門店。

「柳瀬は、柳瀬だから」

それは、ぼくの優しさが唯一届かないところ。ぼくがぼくであるから、鳴海さんは十全な幸せを得られない。

「そうですか」

本当に、ぼくはぼくで在りきれいているだろうか。自信がないから、誰に訊ねるわけでもない疑問符が語尾に乗った。

粗末な部屋ですが、という断りはもう必要ないくらいに、彼女を家にあげてしまっている。いつ彼女が訪れてきてもいいように、布団には毎日コロナをかけているし、蓋つきの小物入れを枕元に用意して、その中身は欠けることがないよう丁寧に充填させている。

「シャワー先入りま」すか、と、最後まで言い切ることができなかった。

腕を引かれて、ぶつかる。唇同士が。ぼくは彼女の侵入を許す。されるがままに、彼女の飢えを満たす。彼女がシャワーすら浴びず、ことに及びたいと言うのなら、ぼくはそれに従うだけ。

「……………ごめ、ん」

「いいですよ」

何に対する謝罪なのだろう、と思う。いつも思う。いつも彼女は、ことの始まりに謝罪を告げる。多分それは、ぼくに対してではないのだろう、と勝手に解釈している。ここにはいない誰かに、許されたいのだ。きっと。

「脱がせていいですか」

震えた額きを確認して、ぼくは彼女が着ているブラウスのボタンに手をかける。いとも容易く、皮は剥がれる。社会性という皮。黒いキャミソールが露わになって、それを捲れば更にブラジャーが露わになって、そのフックを外せば白い乳房が露わになるのだろう。想像して、そういえば今日は何色のブラジャーを着ているんだろうと思いつてキャミソールを捲った。薄紫だった。「したい」日用のものだろう。レースとか、リボンとか、華やかな装飾がされている。答え合わせをしている気分だった。

ああ、そういえば鳴海さんと初めてセックスした日も、同じブラジャーを着ていた気がする。初めての日、あの日？　ぼくは不意に疑問に思った。あの日、ぼくたちがことに及ぶことを誰が想像できたのだろうか。彼女は、誰と「したい」から、このブラジャーを着ていたのだろうか。

「鳴海さん……」

「なに」

「……いや、なんでも」

鳴海さんは、これから訪れるだろうたくさんの快楽に対して、覚悟を決めるように深く息を吸っていた。無粋だな、と思って、出かかった疑問を引っ込める。彼女は、ぼくのさらなる一手を待って再び目を閉じた。ショーツを下ろせば、そこは既にぐずぐずに湿っていて、ぼくはもう一度思い出す。あの日も、彼女は濡れていた。

鳴海さんがこの職場に入ってきたのは十ヶ月前のことで、ここは人の出入りが少ないデパート入力のアルバイトだから、変だな、と最初思った。学生だと思ったのだ。せいぜい、二つか三つ上の先輩だと思っていた。フリーターだと聞いて、そういう人生もあるもんだなあと妙な納得を覚えた。二つか三つどころではなく、その差が八であることを知ったのは、それから十数回の出勤を経た頃だった。

鳴海さんの年齢を知っても、変、という印象が拭いきれなかったのは、彼女の振る舞いのせいだと思う。不愛想というか、ぶっきらぼうというか、邪険というか、剣呑というか。昼休憩でも誰ともしゃべらず、外にも出ず、いつもコンビニで買ったであろうガトーショコラ味の豆腐バーをぼそぼそ食べている。発言の大半が「はい」か「いいえ」で構成されている。時々、背筋が凍るような「なんですか」。お調子者の社員の親父ギャグに、口角を上げるところか瞬きすらしない絶対零度を見せたのは、さすがに彼女が初めてだった。

棘のある眼差しであらゆる他者を牽制する姿は、ハリネズミのように見えた。猛獣ではない。己が針毛を操りきれず、内外への怯えを目に浮かべる小動物。そう見えたから、ぼくに

はむしろ彼女のその不愛想な態度が、彼女自身の弱さの顕れだと感じていた。ただし、そう見えていたのはぼくだけらしく、他のバイトや社員はその棘が刺さらないような一定の距離を置いて彼女と接していた。だから彼女は孤立して、余計にその棘は鋭さを増すばかりだった。そんな彼女をぼくはずっと、遠目で見ていた。

大雨が降った日があった。大雨、という二文字ではその規模を表しきれないくらいのゲリラ豪雨。春の嵐はあらゆる交通機関を一網打尽にし、帰るタイミングを逃した何人かのバイトは足止めを食らっていた。その中に、鳴海さんもいた。ぼくもいた。サボり癖のある同期の穴を埋める形で出勤していたぼくは、一抹の後悔を抱いていた。

タクシー呼ぶかー？ あーでも、この状況じゃつかまもないかもなー。と間の抜けた提案に、学生バイトたちは曖昧に顔を見合わせる。どうしよ、え、一人暮らし？ だよね。俺もだわ。うわー、マジでどうしよ。根本的な解決には一切繋がらないような、湿気た空気を乾かすただけに存在する薄っぺらい言葉の応酬。それをしているぼくたちの目の前を、鳴海さんが横切った。横切って、そのままドアを押し開けて外へ飛び出していった。足は、勝手に動いていた。

「鳴海、さん」

追いつくのに大した時間はかからなかった。リーチの差とか、男女の差とか、運動神経の差とかではない、と思う。躊躇いの有無でしかないと思った。

「家近いんですか」

傘もささずに追いかけてきたぼくを見て、取り繕う間もなく彼女は呆気なく答えた。

「違う、けど」

「どこなんですか、最寄り」

豪雨の中でぎりぎり聞き取れた駅名は、ここから五駅先だった。

「無理ですよ、タクシーとか、つかまるわけじゃないじゃないですか」

「……歩いて、帰る」

「五駅も？」

鳴海さんは視線を泳がせる。そこに、弱さが見え隠れしている。

「無理です。鳴海さん。無理ですよ」

「いいでしょ、別に。放っておいてよ」

「無理です」

「放っておいてよ！」

悲鳴が揺らいで、それはどうしたって虚勢にすらなり得なかった。助けて、と言っているように聞こえた。

「あんた、何？」

「柳瀬悠樹です。鳳明大の一年。学部は理学部生物」

「そんなこと聞いているんじゃないの！ いきなりなんなの、話したこともないのに、なんで」
鳴海さんが聞きたいこと。その文末が「雨音に掻き消されても、察することくらいはできた。」

「心配だから、ですよ」

「……………え」

「鳴海さんはいつも顔色が悪いから。ご飯もちゃんとしたの食べてないから。目の下に隈があるから。だから心配なんです」

呆気にとられた顔をして、鳴海さんは目を丸く見開く。その双眸に、『意外』の二文字が刻まれているのが見えた気がした。

「わたしのこと、心配で、こんな？　こと、を」

「心配しちゃだめですか」

瓦解の片鱗を覗いた。だけど、鳴海さんの鉄壁はそんなに脆くない。脆くないからこそ、彼女の内面は弱いままに在れるのだ。

「……心配だったとして、わたしをどうしたいの」

「助けになりたい」

「どうやって」

「どうやって助けて欲しいですか」

ぼくは、鳴海さんが求めるのをただ、待った。鳴海さんは、また視線を迷わせて、震える息を吸って、吐いて、何度も言いかけてはやめて、そうして存分に迷ったのち、こちらの顔は見ないで言葉を告げた。

「わたしを抱いてよ」

まるで計らったように、嘘みたいに、高架橋の向こう側に豪華な外装のホテルが聳えているのが見えた。

二

気怠い重さを腰に感じつつも、ぼくは起き上がる。ゴミはゴミ箱に捨てて、鳴海さんには掛け布団を被せる。

「さすがにシャワー、浴びたくないですか」

「んー」

生返事だった。布団の側に放っていた服やら下着やらは部屋の隅に軽く畳んでまとめておいて、ぼくは浴室へ向かう。

なるべく新しく綺麗なバスタオルと、前回鳴海さんが忘れていったランジェリーを洗濯機の上に置く。カゴの中にストックしている使い切りのシャンプーセットをひとつ取り出して、それも同じ場所に置いておく。セッティングが完了したら、未だ布団の上で横たわっている鳴海さんのもとに戻る。

「タオルとシャンプー、用意したんで。あとこの前、鳴海さん下着忘れていましたよ。それも置きました」

「んー、ありがとう」

手元のスマホに目を落としていた鳴海さんは、ようやくこちらを向いた。それから、しばしのローディングが挟まったあと、言葉が続ける。

「ああ、あれ。柳瀬んちに忘れてたんだ」

「下着忘れていくってどういうことですか。割と保管に困ったんですよ、あれ」

「ごめんごめん」

鳴海さんは腕を支柱として上体を起こす。乱れた髪を整えるように数度頭を振って、だけどその程度じゃ整わないと知っているから、手櫛を通してロングヘアをまとめていた。

「ねえ、柳瀬」

「なんですか」

「柳瀬は、優しいね」

「……」

言われ慣れた褒め言葉だった。それはぼくの在り方だった。

「柳瀬は、優しいけどさ」

「けど？」

「柳瀬に優しくしてくれる人は、いるの？」

「何言ってるんですか、ぼくにだって優しくしてくれる人くらい」

何でもない感じを装う。軽薄を演出する。ラフにカモフラージュする。

「……………いると思いますけど」

——痛い。

学費の引き落としが来月あるから、たくさんシフトに入っていたほうが安心だ。別にカツカツの生活を送っているわけではないけど、いざというときの頼りの綱は、咄嗟に掴むにはあまりにも心許ないし、なるべくぼくはそれに頼りたくなかった。自分の生活くらい、自分の手に届く範囲で管理したい。

今日もみっちり五時間、画面とにらめっこ、キーボードをカタカタして働いた。「労働」という単語のままごとをしているみたいなこの仕事は、楽だしシフトの融通も利くし近くにベーグルが美味しいカフェがあるから気に入っていた。柳瀬くんは今日も精が出るねえ、と社員の労いを曖昧な会釈で受け止めて、雑居ビルのドアを押す。スリッパからスニーカーに履き替えて、階段を降りる。大学で二コマ実験してきたあとの五時間労働は、いくら簡単な勤務内容と言えど身体に疲労感を募らせる。今日はもう牛めしでいいか、と駅に向かって足を進める。音楽でも聴こうとイヤホンに耳にはめてポケットからスマホを取り出したところで、メッセージが来ていることに気付いた。ロックをかけた状態では誰からのメッセージかまでは分からない。アイコンを見るに、頻繁にやり取りをする相手ではなかった。だからぼくは、迂闊にも息をするようにロックを解除してしまった。

『あんまり私が心配するようなことしないで』

心臓がひと回り縮んだ心地がした。足が止まる。送り主の名前は『柳瀬榛名』。開いたト

ーク画面には、画面の半分ほどを占める吹き出しが連なっていた。下から上に、今から過去に、目が追ってしまふ。

『せっかく大学に行かせた意味がない』

『GPAも下がってる。』

『可が多い』

『前期の成績表を見た。』

上手く酸素が吸えていない気がして、胸に手を当てる。指先がチリチリ痺れている。唇の感覚が白む。大きく息を吸い込もうとして、派手に咽せ返る。

『バイトばかりしないで学費の足しにして。』

『口座にちょっと振り込んでおいたから』

うるさいな、と一蹴できないからぼくは痛い。絡みつくぬくもりの残滓が、ぼくをどこへも行けなくさせる。

全然、前に進める気がしなくてぼくはしゃがみこんだ。アスファルトに掌をつく。小石未満のざらざらが過敏に皮膚を刺激して、しゃがんだ姿勢も不安定で、居心地が悪い。世界にぼくの居場所だけ確保されていないような、そんな居心地の悪さ。

目を瞑って、呼吸だけに神経を注ぐ。息を吸う。息を吐く。それだけのことが難しい。生きるのはこんなにも難しい。自分のために使うための優しさの在庫なんて考えてないから、ぼくの脳はこんなとき、容赦なくぼく自身を責め立てる。こんなところでうずくまったら変な人だ。はやく立ち上がってくれ。手が汚れる。

母親から来たメッセージが、幾重にもぼくを囲んでリフレインする。心配するようなことしないで、つて言ってた。心配するようなこと。ぼくが成績不良で落第すること。バイトにまかせて学生の本業を忘れること。道端でうずくまること。前に進めないこと。

視界の端に、オレンジ色のなかが留まる。視線で手繰り寄せるとそれは、見知らぬマスコットのぬいぐるみだった。頭の部分に切れたボールチェーンがくっついていて。誰かの落とし物だ。拾わないと。拾うためにぼくは立ち上がる必要がある。地面を突き放して、その勢いでぼくは姿勢を立て直す。ぐらっと血が引く上体を、どうにか両足で支える。視界が回復したのを待って、一歩踏み出す。酸素不足の感覚は未だに尾を引いているけど、歩けないことはない。

手に取ったキーホルダーに目立つ汚れはまだないから、多分落とされてまだ間もない。とりあえず道の真ん中を避けて、歩道に立てられた柵にでも引っ掛けておけばいいだろう。なるべく目立つポジションを探りながら、何をやっているんだらうと頭の後ろ側が冷えていくのを感じる。これって、誰のための優しさだろう。母親はこの場にいない。ぼくを見ていない。優しいぼくのことを知らない。

ある程度納得のいく箇所になぬいぐるみを引っかけてから、地面に落としていたスマホを認識する。画面は未だ、母親からのメッセージを浮かべて光っている。拾って指を滑らせる。

『お金ありがとうございます。あとで確認します。』

送信。フリック。

『バイトは減らそうと思います。心配かけてしまつてごめんなさい。』

親指が、画面に引っ掛かる。躊躇うように、送信ボタンの数ミリ横で親指が止まる。無理やり滑らせて、トーク画面には二件のメッセージが並んだ。既読がつくのが怖くて、ぼくはスマホをポケットに押し込んだ。

こちらを見ていたのは、やつぱり気のせいなのかもしれない。ぼくの願望が、甘くてまるい「最初の記憶」のおめかしをしてるのだ。きつと。

願望？ 彼女はずっとぼくを見ている。見てくれている。そうじゃなきゃ、五万円なんて大金、なんでもない日に振り込んだりしない。

十分見てもらっているのなら、ぼくは一体何を望んでいるのだろう。何を願って、記憶という形でぼくに居座っているのだらう。ぼくは潜っていく。記憶に結ばれた、過去に。

父親は物心ついたときから忙しかった。なんで忙しいのか、なにが忙しいのか、それを聞く暇もないくらい、ずっと忙しいらしかった。父親という人の影を記憶の中で掴もうとすると、いつも手からすり抜けてどこかへ行ってしまう。ぼくは父親の顔さえぼんやりとしか覚えていない親不孝者だ。

とてつもなく忙しい父親の代わりに、母親がその一身でぼくたちの世話をしてきた。そう、ぼくたち。ぼくには二つ下の妹がいた。今もいる。ヨーロッパのどこかでなにかの言語の勉強をするため、留学しているらしい。興味がないからよく覚えていない。アグレッシブで才気煥発、兎にも角にも賢くて行動力に優れた妹は、ぼくが十四歳のときに家を離れて名門私立中学に入学した。家には、愚鈍に水底で揺蕩うだめなぼくと、それを引き上げるのに必死だった母親だけが、ぼつんと残された。母親は、ぼくを「ボンクラな兄」ではなく「兄妹共に優秀な子供たちの、兄の方」にするために尽力していた。そのために、彼女はいつも苛立っていた。

ぼくが卒業するまでついぞ行けなかったマスタークラスに、妹は入塾開始から通っていた。ぼくはもう、その段階で悟っていた。母親が望む中学校に、きつとぼくは入学できないこと。母親が望む以上の中学校に、きつと妹は合格することを。小学六年生のころ、ぼくは毎日塾の自習室に缶詰めだったけど、食べたものが排泄物となつて下水に流れていくように、学んだことはすべて眠りの海に流れていった。効率が悪いとか、自分に合わない勉強方法をしていたとか、そういう次元ではなかった。絶望的に、ぼくは頭が悪かった。ロングスリーパーの妹は毎日十一時間寝ていて、寝ぐせのついた頭で受けたテストは毎回全国順位二桁の結果を修めていた。

人の才能はそういうものだ、と、ぼくだけが理解していた。母親も妹も、それが単なるぼくの努力不足であると認識していた。母の迎えは日に日に遅くなり、その分だけぼくは血眼でテキストとにらめっこしていた。そのうち、ベッドに入ってもさっき解いた図形問題がまぶたの裏に浮かんで、眠れなくなった。そうして受験当日も眠れなくて、あっけなくぼくは

不合格を頂いた。受験した中学校は四校、不合格通知も四枚。あのときの母の眼差しがレーザー刻印みたいに焼き付いて、薄れも掠れもせず、八年の間ぼくの脳を支配している。もう二度と、母親にあんな顔をさせてはいけない。そう、思い続けなければいけない。

鳴海さんに言われた言葉を思い出す。あのとき誤魔化した分だけ、ぼくの臓器には苦しさが燻っている。肺が、胃が、心臓が、もっと奥にある何かが、ずっと痛い。

だって、母親が見ているのはぼくじゃなくてぼくの先にいる「優秀なお兄ちゃん」という铸型だし、透明のこの存在は何度も母親の手によって铸型に押し込められてきた。それで腕が曲がろうが首がねじれようが、お構いなしに。澄んだ気持ちで彼女に頭を垂れるには、ぼくはあまりにも痛すぎた。

ぼくがただの「柳瀬悠樹」で在れないのなら、せめて「柳瀬悠架の兄」よりも名誉ある、かつ人に迷惑をかけない誰かになろうと思った。だからぼくは優しくなった。優しくしていれば、せめて誰かの人生に役を与えてもらえるから。それは例えば、「鳴海かもめのセフレ」でよかった。

——でも、鳴海さんはその優しさが怖いと言ったから。ぼくは、「鳴海かもめのセフレ」にすら、もはや成りきれていないのかもしれない。鳴海さんが見ているのは、誰なんだろう。ひとりの柳瀬悠樹であつたら、と願うのは、身の程知らずだけど。

罪悪感からシフトを入れづらくなって、かれこれ十日ほど出勤していない。出勤していない間も気持ちがざわついて、なかなか休まらない。休む必要なんてないのだ。学生の本分は勉強だから。遅くまで近所のコーヒーショップにこもって、レポートを書いたりテキストを読んだりしていた。母親から、さらなる返信は来ていない。

たっぶりの結露がテーブルに円を描いていた。カフェオレがかなり薄まってしまっている。思いの外長居してしまった。窓際の色合いはすっかり明度を落として、空模様が夕飯どきを示していた。広げていたレポート用紙をまとめて、閉じたテキストに重ねる。四隅を揃えてトートバッグに詰める。そこそこの重量になったそれを肩に提げ、店員に軽く会釈してぼくは店を後にする。

出勤していないのだから当然、鳴海さんにも会っていない。困りごとはないだろうか。最も、秋服を買うためにぼくを呼び出すだけのフットワークは持っているのだから、きっと大丈夫だろう。大丈夫じゃないのは、ぼくの方。

バッグの中から鍵を取り出す。鍵穴に差し込んで回して、ドアを開く。玄関に、ぼくのじゃない靴が置いてある。ぼくのじゃないなら鳴海さん、な、訳ない。鍵は確にかちゃんと音を立てたから、さっきまで施錠していたのに違いはない。鳴海さんはぼくの部屋の合鍵を持っていない。

「帰るのこんなに遅いんだ」

探偵ごっこに興じるより先に、答えは示された。鋭い声だ、と思った。何十回も何百回も、ぼくの耳を、身体を、心を貫いてきた鋭さが、今日の前に翳されている。

「あ」

「学校？ それともバイト？」

「えっと」

「違うか、女遊び。そうでしょ」

蓋付きの小物入れを、母親は容易くひっくり返した。当然中身が飛び出る。ぱさばさと音を立てて床に落ちる。蛍光灯を反射して縦線の光を帯びた、コンドームのパッケージ。

「バイトで忙しいのかと思ってお金振り込んだお母さんがバカみたい」

「ちがう」

「何が違うの。お母さん全部見たよ。女の下着。化粧水。乳液。歯ブラシ。何が違うの。何が違うのか言ってみなよ。何も違うないでしょ」

お母さんはバカなんかじゃない。だけど三文字の否定は己の保身だと捉えられてしまつて、彼女の怒りに油を注いでしまう。

「バカみたいバカみたいバカみたい！ バカ！」

矛先が、ゆっくりこちらを向いているのを感じる。反論は、できない。

「塾入れて、お弁当作って、送り迎えして、遠い高校行かせて、参考書買ってあげて、受験に付き添って、一人暮らしさせて、家賃払って、電気代も払って、なんのためにお母さんやっているとってるのバカ！」

こんなにお母さんはぼくの為に尽くしてくれているのに。ぼくはなんにも応えられない。お母さんが求めるぼくになれない。だからバカ。

「悠架のお兄ちゃんなのになんでちゃんとできないの。なんでちゃんとお兄ちゃんになれないの」

お母さんが求めているのは優秀なお兄ちゃん、ぼくはそれになれないからただの愚鈍な誰かで。

それって、ぼくが柳瀬悠樹である必要はないってこと？

急激に指先が冷たくなっていくのを感じる。ここに立っていることを、誰にも許されていないみたいに居心地が悪い。メッセージを受け取ったときとおんなじ感覚。

お母さんの目の前に立っているぼくって、誰だろう。もう彼女に長いこと悠樹と呼ばれていない。そんなの、ずっと分かっていたはずなのに。諦めていたはずなのに。諦めているから、ぼくは優しいのに。

「悠樹のままじゃ、だめかな」

溢れてしまった言葉は、辛うじて母親の耳には届かなかった。だけど、自分がそう認識するには足る声量だった。

柳瀬悠樹のままでありたいという願いが、芽生えてしまっている自覚。

母親は、ひとしきりぼくの部屋にガサ入れをしたのち帰っていった。帰っていった、と言っても、実際どうやって帰るのかは知らない。在来線に揺られて帰れる距離ではないから、新幹線か、夜行バスか、車か。何にせよ、彼女に迷惑をかけたのは事実だから胃が重い。

母親がひっくり返した小物入れの中身をしまう。最後に鳴海さんと会ったとき、残りの数は二枚で、これじゃあ足りなくなるだろうと思って一箱買い足した。だから母親がぶちまけたコンドームはなかなか枚数だった。もう二週間近く、鳴海さんと会っていない。

鳴海さんとの交友を断ったほうがいいのだろうか。母親はそれを望んでいる。「柳瀬榛名の優秀な息子」という席に座るには、そうする他ない。それが母親への優しさだし、親孝行——マイナスをゼロに変えるだけのような気もするけど——になる。

散らばったコンドームを片付けるついでに部屋の掃除をしていたら、本棚とデスクの隙間にレジュメが落ちていたのを発見した。再来週の間テストで使うレジュメだった。探していたことすら忘れていたA4の用紙は、くちゃくちゃと縦長に畳まれてしまっている。ちゃんと大学生をできていない証拠みたいに見えて、喉のあたりがもやで燻る。教授がデータを公開していたはずだから、ぼくはコンビニにプリントしに行くことにした。今からでも、ちゃんと大学生でありたい。ちゃんと立派な息子でありたい。

鍵と小銭入れを上着のポケットに突っ込んで、駅前のコンビニに向かう。ポータルサイトに上げられていたレジュメをダウンロードして、コンビニプリントの設定を進めていると、スマホの画面に灰色のバナーが下りてきた。メッセージ通知、見慣れた野良猫のアイコン。

『今日いまから』

『あえる』

今日、今から？ アプリを開くその一瞬にも、追撃は止まない。

『えきいる』

『そっち』

『やなせ言え？』

セイ、ではなくハウスの誤字だろう。滲み出る感情の揺らぎが、単語の輪郭をぼやけさせる。ぼくはいつもより急いだフリック入力で、降り注ぐ鳴海さんからのメッセージを打ち返す。

『北口のセブンの近くにいます』

『どうしたんですか』

返しながら、その答えをテキストで確認する気はなかった。ぐるっと駅舎の周りを走って、東口のほうに向かう。改札前に、鳴海さんは立ち尽くしていた。

「鳴海さん！」

ぼくの姿を視認すると、意外にも彼女はまともな微笑みをたたえてこちらに歩み寄ってきた。歩調もブレたりしていない。目も泳いでいない。

「いきなりどうしたんですか」

「……んー？ 別に。最近、会ってなかったから」

「……………そう、ですか」

そうだよ、と鳴海さんは口角を上げて答える。

「ご飯、もう食べましたか」

「食べてない。けど、いらない。お腹空いてない」

「おにぎりくらいなら作れますけど」

「いらない。柳瀬」

腕を掴まれる。視線ががち合う。

「早く家、行こ」

鳴海さんは、ぼくの目を見てそう言った。鳴海さんの視線は、ぼくの目の向こう側を貫く。

鳴海さんを先に入れて、ぼくはあとから部屋に入る。腕を捻って鍵をかける。いきなりキスされる可能性も考えて後ろ手で施錠したけど、鳴海さんは静かに靴を脱いで居間に上がっていった。

「本当にご飯いらないんですか」

「なら赤飯でも炊いてよ」

「赤飯？」

鳴海さんは、不意に着ていたスカートをたくし上げる。なんでもないみたいな笑顔で。笑顔が浮かべる鳴海さんが、なんでもないわけがないのに。

「生理が来た」

「え」

「二年ぶり」

ぼくと鳴海さんは気が向いたらいつでもセックスをしていて、それは鳴海さんに生理が来ないからで、ぼくはずっと病院に行った方がいいと言っていたけど鳴海さんはそれを聞かなくて。

「わたしの身体は、また赤ちゃんを作る機関になった」

鳴海さんに生理が来ない理由もぼくは知っていて、それはいわゆる生理不順というもので、強いストレスが生理を止めていて、鳴海さんにとっての強いストレスはつまり。

「すばるくんがいなくても、赤ちゃんを作れるからだになった」

二年前に死んだ婚約者。

「だから、赤飯」

「炊いてほしいんですか？」

たくし上げたからショーツが見えて、そこには赤が乾燥した茶色がシミを作っている。

「鳴海さんがそうしてほしいんだったら、ぼくは今からでも材料買いに行きますよ。でも」なんでもなくない笑顔が、崩れていく。なんでもなくないかなしみに変わっていく。

「本当に鳴海さんは、おめでたいって思ってるんですか」

鳴海さんの瞳が歪む。鳴海さんの唇が震える。鳴海さんの吐息が乱れる。

「……ずっと、こなくてよかった、のに」

ずるずるとしゃがみ込んで、鳴海さんは両手で顔を覆う。くぐもった声が、それでも嗚咽を含んでいることは容易に聞き取れた。ぼくは鳴海さんの横に屈んで、その背をさす。慟哭が、部屋の床に滴っていく。

鳴海さんの着ていたブラウスは、前開きのように見せかけて背中のファスナーで脱ぎ着するタイプのものだったから、手間取って焦った覚えがある。その隙間から覗いた薄紫を、ずっと覚えてる。

ぼくを退けるための無茶ぶり、蓬萊の玉の枝だったらぼくはまんまと欲に溺れて同僚を襲う最悪な男になっていたけど、そういうわけではなかった。鳴海さんは本当に、抱いてほしくてそう言ったらしかった。彼女を抱くことでどうやって助けになれるのかは、皆目見当もつかなかった。

セックスのことは結構好きで、だけどそれに付随する関係値にはあんまり興味がなかった。シンプルに、身体が絶頂に向かうのが好き。相手を絶頂に至らせるのが好き。気持ちいいから好き。一年の夏休みに告白されて付き合った同期の子は、いろんな「好き」の中にぼく宛ての「好き」を忍ばせていたから、だんだん噛み合わなくなつて、後期が始まってすぐ振られてしまった。それ以来、誰とも付き合っていないし、誰ともセックスはしていなかった。

ああ、だけど鳴海さんを抱いてしまったら、鳴海さんに好きを向けられてしまうんだろうか。ぼくが鳴海さんに好きを向けていると、勘違いされるんだろうか。絶頂が近い。最奥で身体同士をくつつける。変色するほど強く唇を噛んでいた鳴海さんが、口を開く。

「……ッ、すばる、くん」

ここにいない誰かの名を呼んで、鳴海さんは果てた。誰だろう、と考えを巡らせたその一瞬で、ぼくも果てた。

「すばるくん、すばるくん、すばる、くん」

ぼくが白濁を吐き出したように、鳴海さんの口からは絶えず名前が吐き出される。何度も何度も呼ぶから、それが自分の名前だったのかと勘違いしそうになった。目が合わないから、それがぼくのことではないことが辛うじて分かった。

「すばるくんどこいったの」

「わかりません」

「すばるくんなんでもないの」

「なんででしょうね」

「すばるくん」

「いいえ」

「なんでしんだの」

——なんでですか。

赤子のようにわあっと、火が付いたように泣き出す。

鳴海さんは、名前のある誰かにずっと囚われている。苦しんでいる。誰でもないぼくは、彼女の救いになり得るだろうか。そこにいたから手を差し伸べただけの、通りすがりのぼくが。

鳴海さんが泣き止むのに、一時間かかった。赤く腫れた目は、雨の日のすりガラスみたいに潤んで、曇っている。

「水と緑茶と牛乳、どれがいいですか」

「なんでもいい」

「牛乳以外は常温です」

「緑茶」

ペットボトルのキャップを捻る。ばきき、と音がして、不可逆の開封状態になる。いつの間にか鳴海さん用になっていた水色のステンレスマグに緑茶を注いで、テーブルの上に置いた。泣き疲れたのか、鳴海さんは目の前にマグカップを差し出されてもしばらくの間放心したままだった。

「すばるくんは」

唐突に、鳴海さんは口を開く。泣いて叫んで掠れて震えて、だけど確かにぼくの耳に届く言葉たち。

「死んだの。二年前に。二年前の十月二十日に。事故で。車に撥ねられて。車道側にいたから。わたしが歩道側にいたから。わたしは死ななかった。婚姻届も書いてた。すばるくんの誕生日の十月二十三日に出しに行く話だった。死んだから無しになった。全部全部無くなった。すばるくんはわたしの恋人。ずっと恋人」

だった、とは言わなかった。

「証明して欲しかった。誰と繋がってもわたしにはすばるくんだけだったことを。すばるくん以外と赤ちゃんなんて作れないことを。すばるくん以外なら誰でもよかった。この世にはもうすばるくん以外しかないから、柳瀬でよかった。柳瀬はすばるくん以外だった」

柳瀬悠架の兄であったように。ぼくはすばるくん以外だった。

「好きじゃないのに、付き合う気がないのに、わたしは柳瀬と繋がっていた」

鳴海さんはまた泣いていて、だけど今度は音もなかった。生理現象のようだった。

「生理が来たら、赤ちゃんが作れるようになったら、わたしは、柳瀬をすばるくんにしてしまおう」

鳴海さんはぼくの両手を握む。

「すばるくんと、柳瀬が、別々の椅子に座っているうちに」

鳴海さんはぼくの両手を自らの喉元に宛てがう。

「柳瀬に、殺してほしいの」

鳴海さんの喉が波打つ。

「柳瀬の優しさで、終わらせてほしい」
指先に脈が伝わる。

「……優しいぼくで、いてほしいですか」

ぼくの喉につつかえた熱い塊が、決壊する。

「鳴海さんが必要としているのは、優しいセックスフレンドですか」

声が引きつる。目が熱い。ぎちぎちに詰まった感情が口から引き出される。

「だったら、ぼくは」

鳴海さんの手を振り解く。

「鳴海さんを殺せないですよ」

まぶたを伏すのは、鳴海さんの顔を見れないから。涙の軌道をコントロールできないから。だから、続く彼女の言葉がどんな感情で発せられているのか、ぼくには確認ができない。

「そっか」

「……………」

「優しくするの、飽きた？」

怒声ではなくて、だけど穏やかでもない。

「それとも、それが柳瀬の優しさ？」

一歩踏み出したら、全部が崩れてしまいそうな薄氷。

「……………そうですよ」

だからぼくは、願えなかった。

「ぼくの優しさは、鳴海さんだけの特別仕様じゃないですよ。そんなにぼくは、鳴海さんのことが好きじゃない」

神経を逆撫でしてしまいそうな言葉が、結局は正解だった。鳴海さんは、少しだけゆるんだ笑い声を上げる。

「安心した」

「どうですか」

「柳瀬が、わたしのこと好きじゃないって言うてくれたから」

求められているのは、鳴海さんのことをちゃんと好きにならないぼく。

「迷子の子供を迷子センターに届けるのとか、誰かが空けたシフトの穴を率先して埋めるのとか。そういうのと同じ優しさだから、安心したの」

鳴海さんにちゃんと優しいぼく。

「そうですか」

ぼくの優しさは既製品で、量産品で、誰にでも適合するし誰にでも似合う。誰でもいい。鳴海さんじゃなくても、いい。鳴海さんに優しい理由は好きだからじゃない。そこにいたからぼくは優しい。

ぼくたちはお互い、ぼくたちじゃなくていい。

「わたしは、優しいだけのセックスフレンドがそばにいてくれたら、救われるよ」

「……そうですか」

鳴海さんは、どこか風いだ声色で言葉を続ける。ぼくが、生きてほしいと願うこと自体が、鳴海さんにとっての救いになってるみたいに。

「柳瀬」

「はい」

「ちゃんと、フレンドでいてね」

ふれんど、という音が、音のまま空気に溶けていく。鳴海さんだけの台詞のように思えなかった。和音みたいに、裏で誰かが同じ言葉を言っているような気がした。

ちゃんとお兄ちゃんになってね、って。

「ええ、もちろん」

どの言葉に対する答えなのか、自分にもわからない。どの言葉にも、ぼくは応えられない気がする。ぼくという人物の輪郭は曖昧で、どこまでも、誰かにとっての何か。伏せていた顔を上げたら、鳴海さんはさみしい笑顔でぼくを見つめていた。だからぼくも、つめたい笑顔を返す。

鳴海かもめが、優しいセックスフレンドを見ている。柳瀬悠樹が、困ったセックスフレンドを見ている。誰でもいいフレンドたちは、ずっと互いを見ていない。